

聴覚障害児教育の最早期教育に関する研究

- 親子の活動のための指導プログラム作り -

佐賀県立ろう学校 教諭 内山 須磨子

要 旨

聴覚に障害のある子どもが生後間もなく発見されるようになり、その対応は、親の子どもへのかかわり方が鍵になるということから本研究に取り組むことにした。これまでの乳幼児教育相談の活動では、聴覚障害の観点に偏った指導や支援を行い、乳幼児にとって成長を促す大切な遊びを十分取り入れていなかったという反省がある。親子のかかわりは、遊びが活動の中心である。聴覚障害乳幼児の健全な発達が望める指導を行っていきたいと考え、乳幼児の心理や発達と遊びの関連を見直して、聴覚障害の観点を盛り込んだ親子の活動（遊び）の指導プログラムを作成した。

<キーワード> ①最早期教育 ②聴覚障害児教育 ③親子の活動 指導プログラム

1 主題について

(1) 主題設定の理由

本校に幼稚部が設置され「ろう教育」が行われるようになって30年近くたつが、幼稚部に入学する以前の乳幼児についても教育相談が行われてきた。特に乳幼児（0～2歳）の教育は、障害が発見されてから親子がどうかかわっていけばよいのか、障害をどのように認識して自信をもって子育てをしていかなど、主に子育て支援、親子の活動及び聴覚活用に関する支援を中心に行っている。

1999年3月に出版された文部省の教育要領には、3歳未満の乳幼児を含む教育相談に関することが明記されており、海外の研究においても生後6か月以内で聴覚障害が発見され、補聴器を装着して療育を開始したケースでは聴覚を活用して言語を習得するのに大きな期待がもてるという報告がなされている。このようなことから、今後、最早期教育は更に重要になるであろう。

本校の乳幼児教育相談では、親子で来校し、発達段階に応じた遊びや体験活動を行っている。しかし、親子のコミュニケーションがうまくいかず悩んでいる親が多い。例えば、かかわり方が分からず子どもとうまく遊べない、子どもの目線に立って物事が考えられない、障害の認識が弱いため我が子をかわいいと思えないなどが挙げられる。そこで、本研究では、親（主に母親）への理解を深めると共に、親子でできる乳幼児の発達に応じた遊びや体験活動を整理した指導プログラムを作成し、よりよい親子の活動への支援を行いたいと考え、本主題を設定した。

(2) 主題の意味

- ・ 聴覚障害児の最早期教育とは、「0歳から2歳まで（幼稚部入学前）の教育」と規定する。
- ・ 「親子の活動」は、発達に応じた感覚遊びや音遊び、運動、再現遊び、集団でのごっこ遊びや体験活動などのことである。

2 研究の目標

聴覚障害乳幼児のコミュニケーション能力の基礎を培い、言語獲得の素地を作るために、親子でできる乳幼児の発達に応じた遊びや体験活動を整理した指導プログラムを作成する。

3 研究の内容と方法

- (1) 親子関係や親子活動の実態把握
- (2) 親(主に母親)理解のための研修(教育センターの講座等)
- (3) 文献による研究

- ア 聴覚障害や親子の関係に関する文献研究
- イ 乳幼児期の発達と遊びに関する文献研究

- (4) 聴覚障害乳幼児の指導プログラム作り

4 研究の実際

- (1) 指導プログラムの作成に当たって

乳幼児にとっての活動そのものが「遊び」と考えられる。乳幼児は、いろいろな遊びの中から多くの感覚機能や運動機能を高めていく。そして、それが物の概念や物を認知する力となり、思考ができるようになる。さらに、言語生活に欠かせない言語獲得の素地が育つことになる。遊びは「楽しい」ものでなくてはならないし、自由に活動できることが何より

も乳幼児にとって満足することになると思われる。しかし、ここで言う「楽しさ」とは目的のない自由遊び(放任遊び)ではなく、指導者が意図をもった遊びの中の楽しさのことである。そこで、発達に応じた遊びの指導プログラムを作成することにした。

指導プログラムを作成するに当たっては、実態と発達を考慮しなければならない。実態の面から見ると親や子の実態、社会の情勢、親の要求がどうであるかということである。発達の面から見ると聴覚障害の視点と支援、0歳児から2歳児の心理や発達及び保育はどう考えていけばよいかということである。これらの視点を基に、遊びの指導プログラムを作成していくことにした。

そして作成したプログラムを使い学校での実践並びに家庭での実践を行っていく。その際に教師が留意しなければならないことが親(主に母親)理解であろうと思われる。聴覚障害乳幼児をもつ親は障害のこと、子どもの将来のこと、家族のこと等様々なことで心が不安定になりやすい。乳幼児と常に接する親(主に母親)の心身が健康であることが乳幼児の健全な発達には最も重要であるため、教師は親(主に母親)を理解し常に支える立場でなければならない。学校でできることと家庭でできることを十分に理解し合いながら連携を取って聴覚障害乳幼児を育てていかなければならないと考える。(図1参照)

- (2) 実態把握と課題

表1に示すように、コミュニケーションがうまくいかずに二次的障害が現れてくることが多い。

表1 聴覚障害乳幼児の実態

| 年齢 | 実 態 |
|-----|--|
| 0歳児 | <ul style="list-style-type: none"> ・大人のあやしに対して反応が遅かったり、しなかったりする。 ・表情がやや乏しく、笑うことが少ない。音への反応が悪い。 |
| 1歳児 | <ul style="list-style-type: none"> ・大人の指示が分からず、かんしゃくを起こすなどの二次的障害が現れ始める。 ・0歳に近い1歳児と2歳に近い1歳児とでは成長の度合いや遊び方が違う。 |
| 2歳児 | <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな遊びや経験が少ないため、与えられる課題を待っている傾向が強い。 ・経験の差が出て、個人差が大きい。(対人関係、遊び方、身辺自立など) ・集団活動や「ごっこ遊び」などで、コミュニケーションがうまくいかず十分楽しめない。 |

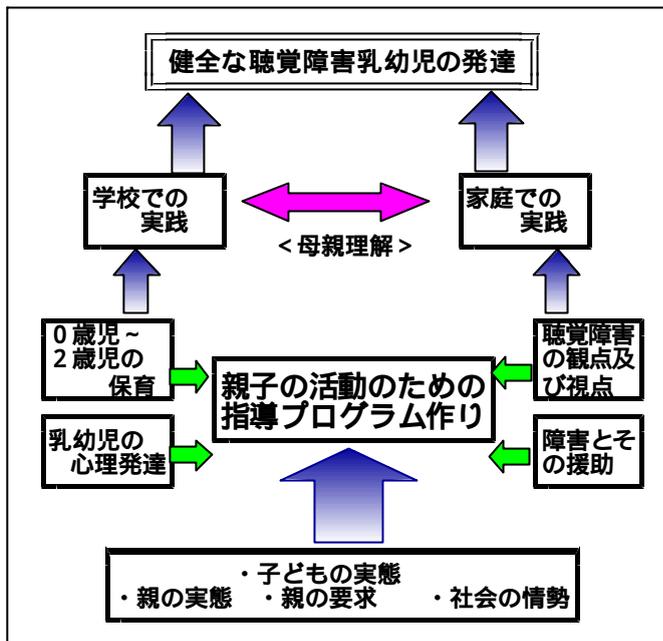


図1 研究の全体構想図

表2に示すように、乳幼児の場合の課題は、大人の側の課題と言ってよい。

表2 聴覚障害乳幼児教育に関する課題

| 親 | 指導者 |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・子育てに自信がもてない。 ・家族の協力や周りの理解が得られないため、母親のストレスが溜まり、心が不安定になる。 ・遊びの大切さや遊び方を知らず、子どもと一緒に遊びを楽しみ共感し合うことができない。 | <ul style="list-style-type: none"> ・0歳児から2歳児の発達や心理を十分に理解して親子に対する支援をしていたか。 ・遊びや体験活動が発達に即していて、系統的に組立てられていたか。 <p>指導プログラム作りの必要性がある。</p> |

(3) 親（主に母親）理解のための研修と文献研究

ア 親（主に母親）理解のための研修

教育センターで実施された「教育相談断続研修」の講座を受講して、カウンセリングに関する研修を行った。乳幼児の場合は、親子で登校して親子で活動する（主に母親）ことが多いので親の心や体の状態を把握することはとても重要なことである。親の状態で子どもが変わると言っても過言ではない。親（主に母親）の心を理解し、和らげていくことは必要不可欠である。13回の講座を受講し、カウンセリングの考え方、やり方、演習等はこれからの支援に役立つものと感じた。

イ 文献研究

(ア) 聴覚障害や親子の関係に関する文献

トライアングルの会の南村洋子は、「聴覚障害」月刊雑誌2001年2月号で、次のように述べており、⁽¹⁾ 親子関係の援助の必要性がうかがえる。

遊びを知らない親世代の時代が来ることを考えるとき、専門家は、親に対し「子どもと通じ合う」「子どもを理解する」といった援助において、子どもと楽しく遊ぶ方法や子どもの遊び心の引き出し方等の具体的技法の援助が必要になってくるとされる。こうした援助の中で、お母さんと子どもとの試行錯誤の生活を見守り、待ち、日々の小さな積み重ねの成果を認めながら、お母さんを気長く励まし続けることが大切である。 (引用者による要約)

(イ) 乳幼児期の発達と遊びに関する文献

大阪保育研究所の研究によれば、乳幼児期（0歳児～2歳児）の保育に関して、次のように述べられている。⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾

0歳児においては、大人が子どもと向き合って楽しく遊ぶことが大切で、あやし遊びや揺さぶり遊びに加えて移動運動などをしっかりさせていかなければならない。1歳児においては、歩くようになるので、全身的粗大運動を数多く保障して運動能力を養うとともに、対象への操作的活動や手や指を使った活動により物の認識・概念・言語獲得のための素地を作っていく必要がある。2歳児においては、全身運動や手や指を使った活動を基盤に置きながら「みたて」「つもり」「ごっこ」遊びへと発展していく遊びを展開していき、行為や操作の見通し、自分でやろうとする気持ちや考える力を育てていくことが大切である。 (引用者による要約)

年齢や発達と遊びには関連があり、遊びが子どもを成長させていくことが分かる。

(4) 聴覚障害乳幼児の指導プログラム作り

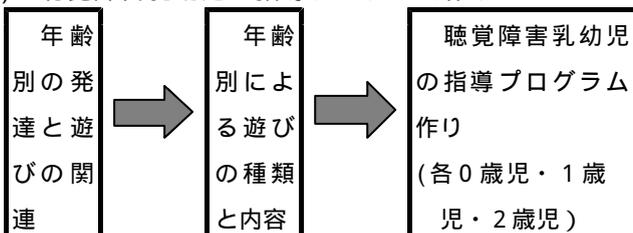


図2に示すように、まず「年齢別の発達と遊びの関連」についての整理を行い、次に「年齢別による遊びの種類と内容」について遊びの具体的内容を挙げて整理を行った。そして、聴覚障害乳幼児の指導プログラムを作成した。

図2 指導プログラム作りの手順

年齢別の発達と遊びの関連

図3は、「年齢別の発達と遊びの関連」について0歳児から2歳児までをまとめたものの一部である。「～歳児は、～な発達をするため～な遊びが大切である」ということを示したものである。この図を見れば、0歳から2歳までの発達と遊びの関連及びねらいが分かり、どんな遊びをいつ行っていけばよいかが目瞭然である。発達につれ、遊びが全身運動や感覚遊びから手や指を使った遊びへと変化し、その遊びが、やがて「みたて」「つもり」「ごっこ」遊びへとつながっていくことが分かる。発達に応じてねらいをもった遊びを行っていくことが大切である。

(実際は、A4判1ページ)



年齢別による遊びの種類と内容

図4は、「年齢別による遊びの種類と内容」について0歳児から2歳児までをまとめたものの一部であり、を具体的にしたものである。0歳児と1歳児、1歳児と2歳児の遊びの内容の違いを具体的な遊びの例を挙げて説明している。同じ種類の遊びでも年齢や発達に応じて内容が異なっていることが分かる。また、内容が同じような記述でも実際はその年齢や発達に応じた遊びの展開をすることになる。そして、聴覚障害乳幼児の視点から、聴覚に関する音遊びや舌遊び、息遊びも組み入れた。(実際は、A4判1ページ)



聴覚障害乳幼児の指導プログラム作り

図3、図4をより具体的にしたものが、図5の「遊びに関する指導プログラム」である。これは0歳児のプログラムの一部で、実際は0歳児から2歳児までのプログラムである。聴覚障害乳幼児の活動を計画していく際に、行事や体験活動と並んで大切なプログラムとなる。活動案を立てる際、どんな遊びを盛り込んでいけばよいのかが分かる。しかし、このプログラムは大まかなプログラムであり、細部にわたっては、実態や発達に合わせて各学校や各個人で計画を立てていくものであろう。活動の細案については、個人の発達や実態に合わせて、様々な工夫をして提示したり展開したりしていく必要がある。(実際は、A4判7ページ)

| 年齢 | <発達> | <ねらい> | <遊び> |
|-----|--|--|---|
| 0歳児 | <ul style="list-style-type: none"> あやされると手足を動かしたり、ほほえんだり、声を出したりする。 玩具を媒介としながらあやされることを好む。 四肢を活発に動かそうとする。 | <ul style="list-style-type: none"> 大人との信頼関係の感覚系の発達促進をする。 運動機能を活発にして、高める。 補聴器を装着して聴覚の活用をする | <ul style="list-style-type: none"> 感覚遊び 全身運動 手指遊び 音遊び 口腔運動 |
| 1歳児 | <ul style="list-style-type: none"> 歩行の確立により広い範囲での運動に対する要求が高まる。 | <ul style="list-style-type: none"> 足腰を鍛え、いろいろな器官を刺激し運動感覚系の機能を高める。 | <ul style="list-style-type: none"> 外遊び 変化する素材を手を使って遊ぶ |

図3 年齢別の発達と遊びの関連の一部

| 遊び・活動の種類 | 具体的な遊びや道具は、聴覚障害に関する活動 | |
|----------|---|--|
| 0歳児 | <ul style="list-style-type: none"> 感覚遊び 全身運動 手指遊び 全身運動 | <ul style="list-style-type: none"> 見る、聞く、触る、あやし遊び 口腔運動 大人に手伝ってもらって体を動かす遊び(仰伏遊び、坐位遊び、ゆさぶり遊び、移動運動) 感覚遊び、手指を使った動作、手遊び |
| 1歳児 | <ul style="list-style-type: none"> 手指を使い、手を刺激する遊び 関係的遊び 創造的、構成的な遊び 友達とかかわる遊び 文化的な遊び 音遊び 舌遊び 息遊び | <ul style="list-style-type: none"> ・手押し車、三輪車、平均台、ビニールプール、すべり台などの遊具遊び ・戸外の遊び、歩く、坂を登る、走る ・手遊び歌、わらべ歌、リズム、ダンスなど ・砂、水、土、粘土、紙、布を使った遊び ・ぬいぐるみ、人形、写真 ・積み木、ブロック、のりつけ、絵の道具、パズル ・ミニカー、電車、人形、ぬいぐるみ、市販のおもちゃ ・砂、水、粘土、紙、布などを使った遊び ・簡単なゲーム遊び ・玩具を使った遊びや遊具遊び ・絵本、紙芝居 ・音源探し(音に関心をもたせる)) なめる、あつぱつぱ、舌ころがし シヤボン玉、象の鼻、ラッパ、紙ふぶき |

図4 年齢別による遊びの種類と内容の一部

(7) 0歳児指導プログラム

| 目標 | | | | |
|---|---|---|--|---|
| 母親(それに代わる保護者)や教師と一緒にいろいろな感覚遊びを楽しむことにより、視覚、聴覚、触覚などの感覚機能を伸ばす。 母親(それに代わる保護者)や教師に手伝ってもらい、体を楽しく動かしながら全体の感覚を刺激し、調和の取れた発達をする。 | | | | |
| 年齢 | 遊びや体験活動 | 使用する道具及び内容 | 活動内容及び教師の支援(は聴覚障害への支援) | |
| 0歳 | <ul style="list-style-type: none"> 感覚遊び 聞く 見る あやし遊び 全身運動 | <ul style="list-style-type: none"> ガラガラ メリーゴーランド 太鼓 笛 ラッパ いないいないばあ 左右対称の動き | <ul style="list-style-type: none"> 音の出るおもちゃや色のあざやかなものをつくる。 ことばかけは、ゆっくり、はっきり、正しく、豊かな感情を込めて話しかける。 「いない、いないばあ」などの遊びをする。 左右対称の手足の運動を促進させる。 | <ul style="list-style-type: none"> 視覚や聴覚の発達 聴覚活用 親子がかかわる |

図5 聴覚障害乳幼児の指導プログラムの一部

(5) 指導プログラムの実際

今回作成した「指導プログラム」を利用して指導計画を作っていくことになる。今回作成した遊びの指導プログラムに、年間行事や体験活動、両親への指導及び支援のための講座などを考慮して計画を立てていく。その基盤には、「聴覚障害乳幼児の手引き」があり、常に念頭に置いておく必要がある。

ア 実際の活動計画案の例（月案）

図6は、「聴覚障害乳幼児の手引き」を基本に、「年間計画」を参考にしながら、今回作成した「遊びの指導プログラム」を加えて、10月の活動計画を作成した例である。

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|----|---------|-----|---------|----------|-----|----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 休 | お月見会 | 幼稚園 | *砂遊び | <野菜スタンプ | 幼稚園 | 休 |
| み | 「月」の絵本 | 部 | (みたて遊び) | ----- | 部 | み |
| | | | 会議で指導なし | *散歩 | | |
| 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 |
| 休 | <品物作り | 幼稚園 | *ボール遊び | *すもう | 幼稚園 | 休 |
| み | やさしい歌 | 部 | (的当て) | 「すもう」の本 | 部 | み |
| | *あやし遊び | | 会議で指導なし | 音遊び | | |
| 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 |
| 休 | *すもうごっこ | 幼稚園 | *お店ごっこ | <お店ごっこの絵 | 幼稚園 | 休 |
| み | 「すもう」の本 | 部 | 会議で指導なし | *マッチシグ遊び | 部 | み |
| | *布で遊ぶ | | | *ある,ない遊び | | |
| 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 |
| 休 | 息遊び | 幼稚園 | *新聞で遊ぶ | 音遊び | 幼稚園 | 休 |
| み | (シャボン玉) | 部 | (みたて遊び) | (太鼓の音で) | 部 | み |
| | *あやし遊び | | 会議で指導なし | *よーいドン! | | |
| 28 | 29 | 30 | 31 | | | |
| 休 | *粘土遊び | 幼稚園 | ◎秋の遠足 | | | |
| み | (みたて遊び) | 部 | ◎遠足の絵本 | | | |
| | 音源探し | | 会議で指導なし | | | |

図6 活動計画(10月)の例

活動の細案は、実態に合わせて、実物、写真、絵本、絵カード等を使い、子どもが飽きないような工夫をしていくことが大切である。その一例である「小麦粉粘土遊び」の活動を取り上げる。

イ 指導プログラムの実践例 <小麦粉粘土遊び>

| | | | | |
|--------|---------|--|---|---|
| 1 | 題材 | 「小麦粉粘土遊び」 H13,11,28(水) (10:00~11:30) | | |
| 2 | 題材設定の理由 | 粘土は、素材自身の可塑性が高く、幼児にとって「みたて遊び」をする上で最も自由な活動を展開してくれるものである。(中略)このことは、ひいてはことは豊かにして言語獲得の素地を作ることにつながっていくと考えられる。 | | |
| 3 | めあて | <ul style="list-style-type: none"> ・小麦粉粘土を使い、丸めたりちぎったりしながら手の巧緻性を高める。 ・大人が上手に誘って、簡単な「みたて遊び」ができるようにする。 ・後片付けや衣服の着替えなどをできるだけ自分でできるようにする。 | | |
| 4 | 展開 | 活動 | 支援の留意点 | |
| 展 開 | 1 | 朝の歌を歌い、朝のあいさつをする。 | <ul style="list-style-type: none"> ・歌詞カード ・名前カード | <ul style="list-style-type: none"> ・歌を歌ったり、あいさつをしたりして楽しい雰囲気を作る。 |
| | 2 | 小麦粉粘土の材料を見せて、粘土を作ることを知る。 | <ul style="list-style-type: none"> ・小麦粉 (1kg) ・塩 (250g) | <ul style="list-style-type: none"> ・材料を見せながら、粘土を作ることを知らせて興味や関心をもたせる。 |

図7 「小麦粉粘土遊び」の指導案の一部

粘土は、幼児にとって自由な活動を展開してくれる遊びである。粘土に働きかける中で手の巧緻性を高める活動として有効である。小麦粉の段階から粘土をこねていく作業を通し、変化する楽しみを十分に味わわせようと考えた。その結果、これまで粘土遊びにあまり興味をもっていなかった2歳児が1時間半程度の



写真1 粘土遊び

間、飽きることなく楽しく遊んでいた。小道具は、活動に合わせて随時提示していった。親と子ども、教師と子どもの会話が弾み表情がとても良かった。

(6) 家庭との連携

乳幼児の生活は、ほとんどが家庭で過ごすため、子どもの興味や関心を常に把握するにはその生活の様子を知ることとはとても大切である。また、家庭との連携をうまく取ることが、乳幼児の望ましい発達の一歩の近道だと考える。さらに、子どもたちは、指導に来る日以外は家庭の中で過ごすため、母親には日常生活を記録してもらい、生活の変化を見て支援することが大切である。母子の記録用紙(図8)

は、親と教師の連絡簿にもなっている。また、**絵日記**（写真2）も、学校と家庭をつなぐものである。

| 年月日 | 睡眠・排泄・食事 | 聞こえと発声 | 遊びや興味(子ども) | 母親の感想 | ことばの記録(理解語・自発語) |
|--------|---|--|---|--|--|
| (例) 氏名 | ・～時に就寝 ・排便を知らせる。 ・自分で便器に座る。 ・朝～昼～夜食欲なし。 ・～と～を少し食べた。 | ・車の音に気がつく。 ・あーと言っ て呼ぶ。 ・掃除機の音に振り向く ・テレビの音を大きくして聞く。 | ・積み木で遊 びに集中して遊ぶ。 ・親子で絵本を 読む。 ・(～の本) | 音に気付いてく れたい。 ・よく笑うので 声が出ていた。 声を出して呼んだので うれしい。 | ・あー(母) ・車(身振り) ・高い ・ぞう(身振り) ・おいしい (手話) ・からい(表情) ・聞こえたよ (身振り) |

図8 母子の記録用紙



写真2 絵日記

5 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

最早期の教育の在り方について研究が急がれている中、今回の研究「聴覚障害児教育の最早期教育に関する研究」を進めてきた。この研究の鍵は、親子の活動を指導の中に計画的に組み入れ、親子のコミュニケーションがうまくいくように支援することにあった。そこで、子ども本来の遊びということに注目してその指導プログラムを作成しながら、親（主に母親）理解のための研修として、本教育センターで行われた教育相談断続研修に参加し、心の問題やカウンセリングについて学んだ。

指導プログラムの作成に当たっては、乳幼児に関する文献研究を行い、年齢による発達やそれに伴う遊びの内容の整理と分類を行った。この作業で、発達と遊びの関連とその重要性が分かり、プログラム作りに十分に生かすことができた。今後、このプログラムを基に、遊びを活動の中心とした指導計画を立てていけば、子どもが本来持っている遊びへの関心や意欲を引き出しながら聴覚障害乳幼児の効果的な指導ができるであろう。そして、そのことが聴覚障害乳幼児を健全に発達させることにつながっていくと考える。私たち指導者は、遊びの大切さやそれによる発達をしっかりと理解して指導をしていかなければならない。その意味では、乳幼児の遊びを分類し、系統付けたことは意義があったと思う。また、年間を通じて遊びに偏りがなくなり、乳幼児本来の遊びを自信をもって展開できることになると考える。

(2) 今後の課題

ろう教育を取り巻く環境や考え方が大きく変化する中、これからのろう教育はいろいろな意味で変化せざるを得ないが、乳幼児教育の場合は、親子のコミュニケーションがうまくいくことが最も大切であることに変わりはない。今後は、指導プログラムに沿った活動を展開していく中で、親子関係の支援をどう積み上げていくかが課題と言える。そして、他機関とも連携を取りながら、聴覚障害乳幼児の健全な発達に努めなければならないと考える。

《引用文献》

- (1) 聾教育研究会 『聴覚障害』月刊雑誌 2月号 2001年 通巻599号 pp19-24
- (2) 大阪保育研究所 『年齢別保育講座 0歳児の保育』 1998年 あゆみ出版 pp39-59
- (3) 大阪保育研究所 『年齢別保育講座 1歳児の保育』 1997年 あゆみ出版 pp39-48
- (4) 大阪保育研究所 『年齢別保育講座 2歳児の保育』 1999年 あゆみ出版 pp39-51

《参考文献》

- ・ 菅原 廣一 他 『コミュニケーション障害とその援助』 1991年 明治図書
- ・ 品川 不二郎・孝子 『一歳～二歳の心理としつけ』 1976年 あすなろ書房
- ・ 高橋 保子 『新訂 0・1・2歳児の指導計画』 2001年 教育出版
- ・ 都築 繁幸 『聴覚障害幼児のコミュニケーション指導』 平成10年 保育出版社
- ・ 田中 美郷 『家庭における難聴児指導の手引き』 平成2年 帝京大学医学部附属病院
- ・ 川村 秀忠 『学習の基礎をつくる100の遊び』 2001年 学研